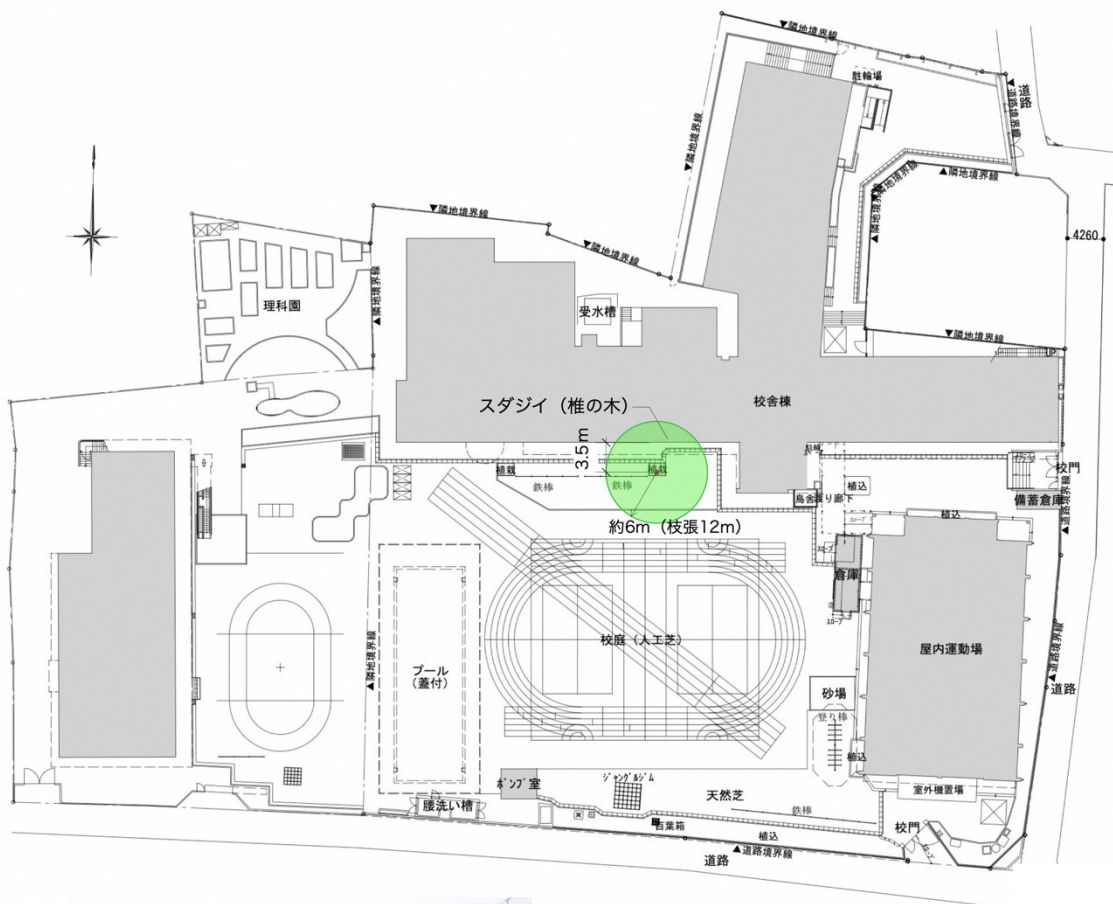


小日向台町小学校椎の木について

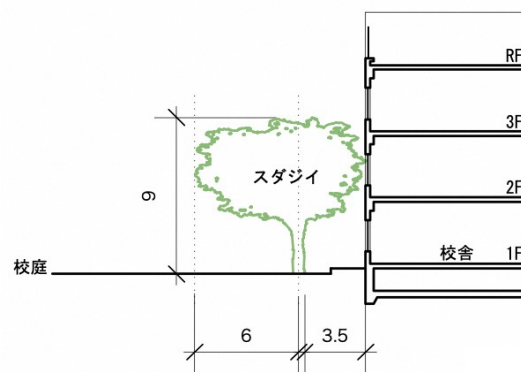
1 現状



現況配置図



スタジオ現況写真

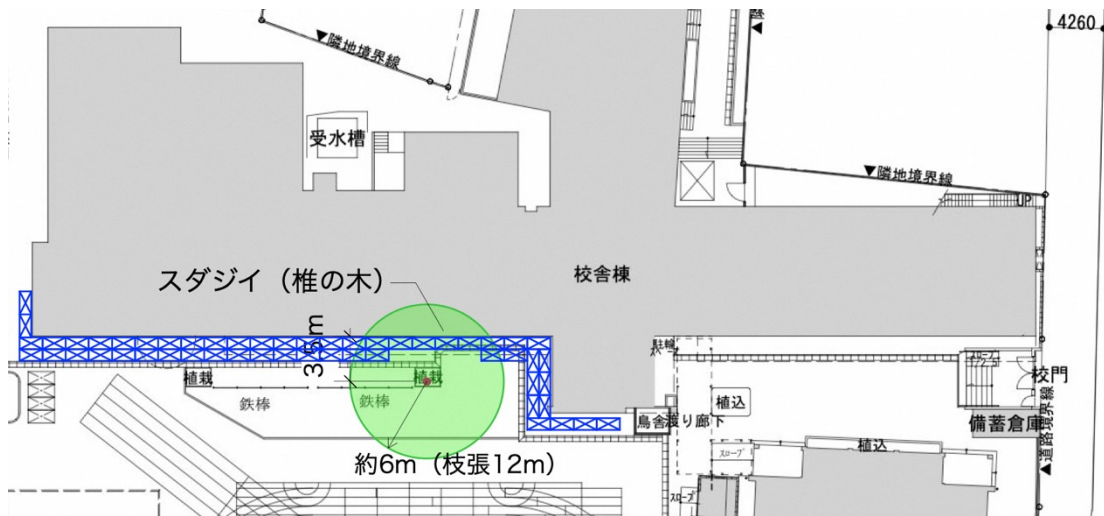


現況断面図

- ・ 樹種：スタジオ（椎の木）、樹高：約9m、幹周：206cm、枝張：12m
- ・ 樹齢：少なくとも75年（昭和22年頃に植樹）（3代目）
- ・ 校舎と樹木との離隔距離：約3.5m

2 既存校舎解体時の懸念事項

(1) 仮設足場施工時



想定仮設配置図

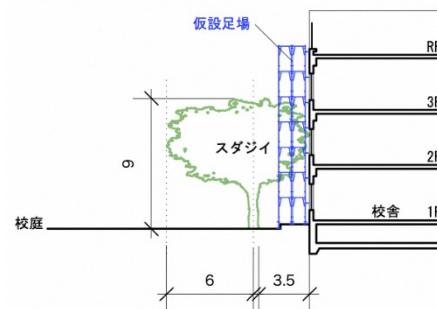
懸念事項：既存建物外周に足場を組むため足場と樹木が干渉する。

→見解*

「枝の剪定や部分的に足場を設置することで椎の木を生かすことは可能と思われる。」

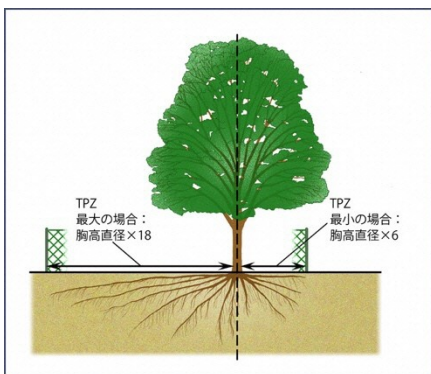
「剪定時期や剪定箇所によっては菌が樹木に入り込み、枯れるリスクがある。」

(常緑樹は葉が無くなると枯れるリスクが上がる)



想定仮設断面図

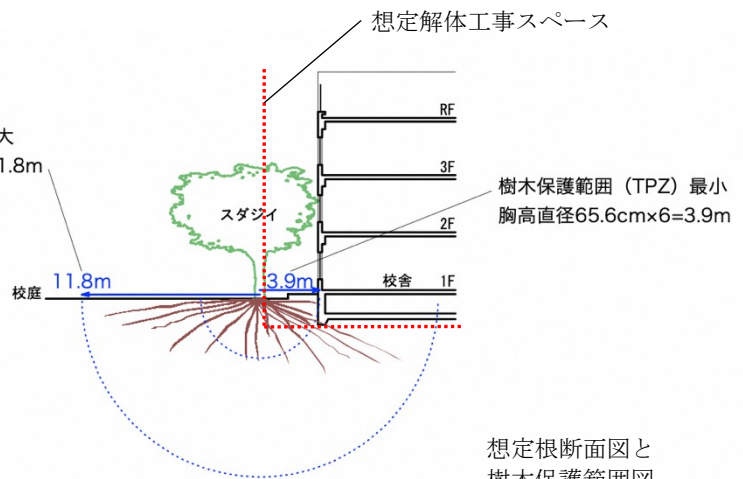
(2) 既存校舎解体時



樹木保護範囲図

(Tree Protection Zone 略称 TPZ)
街路樹診断協会 HP より抜粋

樹木保護範囲 (TPZ) 最大
胸高直径65.6cm×18=11.8m



想定根断面図と
樹木保護範囲図

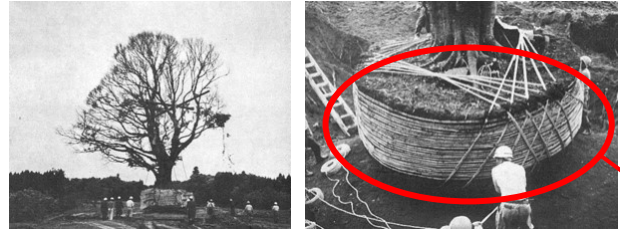
懸念事項：既存建物基礎と根が干渉している。

→見解*

「基礎の裏まで地中で根が広がっていると思われるため、建物基礎を解体する際は根の抜根が必要となる。校舎との離隔から、基礎解体時には重機作業スペースもあるため、樹木本体の半分以上の範囲の抜根が必要になる。特に幹に近い部分の根を伐根するので、枯れたり倒木するリスクが高い。」

3 移植のための根鉢形状と掘削範囲について

- ・移植時の根廻し工事で行う根鉢の大きさは、計算式により算出できる（一般財団法人日本緑化センターHP 参照）。



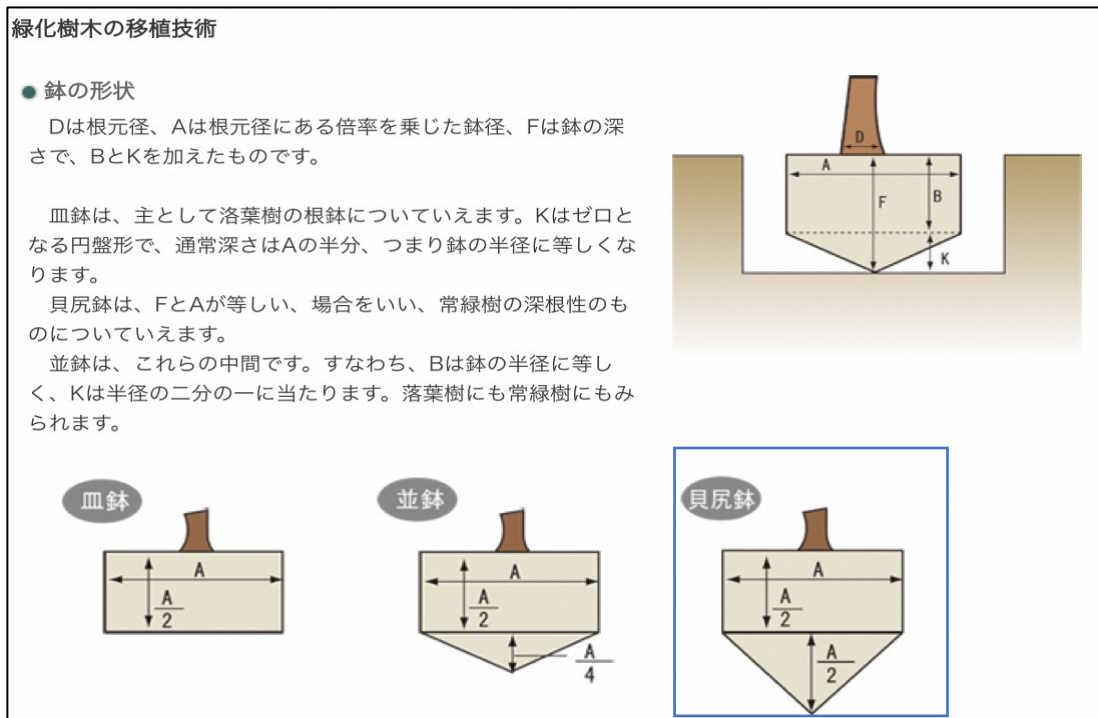
根鉢

移植事例写真「グリーン・エージ」1984年2月号記事（一般財団法人日本緑化センター発行）より抜粋

(1) 根鉢径の計算

根鉢径(A)=定数+(N-3)×d、定数：24、N:根本径=80cm、d:係数4（常緑樹）

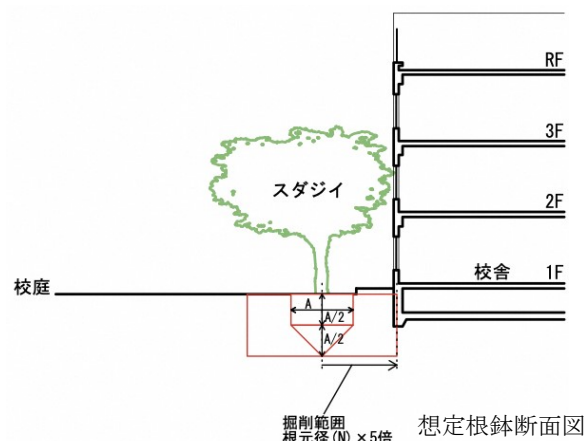
根鉢径(A)=24+(80-3)×4=332cm



一般財団法人日本緑化センターHPより（抜粋）

(2) 根鉢の形状と掘削範囲

- ・スタジイは常緑樹の深根性のものであり、貝尻鉢とする。
- ・根鉢径(A)=332cm、A/2=166cmとなり、現況断面図（右図）に根鉢形状を図示する。
- ・掘削範囲（根鉢）は根元径×3～5倍程度必要である。
- ・根元径80cm×5倍で計算した場合、掘削範囲は既存校舎とぶつかる。移植のための十分な根鉢を確保することは難しい。
- ・根元径80cm×3倍で計算した場合、数字上は移植可能だが、活着の可能性は下がる。なお、敷地外移植は不可（運搬のために幹を切る、葉を落とす等の処置により枯れる可能性が高い。）敷地内移植の場合、改築工事の支障にならない場所の確保が課題。



→見解*

「スタジイは移植が難しい樹種である。移植のためには暑い時期を避け、2年ほどかけて四方から根を切った後、掘削する必要があるが、活着率は低い。活着した場合でも寿命は30年程度ではないか。」

見解*：調査に協力いただいた造園会社及び植木生産者の見解